

て初めて知ったのです。そのとき、後輩だった見習士官は泣いていました。

部隊の三個中隊くらいは蒲郡へ集結、九月二日天皇陛下の御真影の前で、部隊長が「終戦の詔書」を読んで、軍関係の書類全部を焼却しました（軍歴はその後に復元）。

部隊は解散しましたが、私は軍曹になっていたので、准尉は「残務整理に残れ」と言われましたが、三年以上も家に帰っていないからと断り、九月二日、蒲郡から稲取へ帰ったのですが、家に着いたのは陽のあるうちでした。「家の敷居をまたぐまでは階級章を付けて行け」と言われ、兵隊は全部兵長の階級章を付けて家に帰させました。私は家に帰って、初めて父の死を知りました。しかし、他の家族、祖父母や母や弟妹は元気でした。終戦後は私が家長として、九人の家族を養うことになりました。

私たちは幸いに生きて故郷に帰り、荒れ果てた祖国復興と、この美しい故郷のため「ガムシヤラ」に働き続けました。平和な社会、豊かな経済再建を成し遂げ

ながら老年の域に入ってしまった。これからも生き続けて子孫のため、郷土発展に尽くして行く積りですが、何につけても大陸の野戦に散った亡き戦友のことを思うとき、万感胸に迫り、ただただ御冥福を祈るのみであります。

## 父母の祈りか、

### 兄弟六人全員生還

千葉県 本吉 進

私は大正十二年九月六日、千葉県長生郡長南町の農家の六男として生まれた。学校卒業後は農家の手伝いをしていたが、戦争も熾烈を極めつつあった昭和十八年徴集兵とし、千葉県茂原町で検査を受け、第一乙種合格となった。当時は第一乙種も現役兵で、昭和十八年十二月二十日、東部第六十四部隊の東葛飾郡布施村の隊に入営した。

その部隊の営庭には工兵の第十四部隊もあったが、

中支の鶏兵団（第六十一師団）の下士官がわれわれを受領のため来て、仲間八〇人ほどと軍隊の基本教育のみを受けた。軍隊の食事は大豆飯と汁と魚に漬物とか、野菜の煮つけなどで、腹が減らぬ程度の量はあった。教育中のビンタは全くなく、われわれが予想していたより良い待遇であったと記憶している。

昭和十九年一月七日、列車で門司港まで、窓は鑑戸で閉め切られ、外の様子を見ることができない。出港後、冬の玄界灘は荒れていて波が大きく船酔いが続出し、食事が出てもだれも食べられない。甲板上の便所に行くのも困難だし、満員である。波が高く上がるときはよいが、下がる時は気持ちが悪くなるもので、私も皆と同様で慣れぬ船中は苦しかった。

しかし、釜山へ上陸、下船すると船酔いはなくなり楽になるものである。朝鮮經由の列車は客車ではあるが椅子は木で長い旅故尻が痛い。窓は鑑戸を閉めっぱなしで、外が見られぬので、朝鮮の状況は分からない。朝鮮の冬は車中でも寒さは厳しいものだった。鮮満国境を越え、山海関から中国へ入る。列車はそのまま津

浦線で南下し、支那安徽省蕪湖へ着いた。

蕪湖は本部所在地であり、部隊は鶏第三〇六四部隊一歩兵第一五七連隊である。われわれ初年兵の集合教育は蕪湖の本部で、教官は梶上少尉で、九月まで教育を受け、十月に第九中隊に配属となった。その間、だいぶ絞られ、ビンタもだいぶ食らった。班長は現役の三年兵で厳しい人だった。ほかに助手二名（十六年徴集の三年兵）。私の本業は擲弾筒だったが、教育期間中は討伐には出なかった。

中隊長は士官学校五十五期の大部大尉であって、蕪湖から二〇里（八〇キロ）くらい離れた山奥の鶏頭嶺警備隊である。私は配属後半月ほど経って分屯隊勤務となる。兵力は軍曹を長とし以下二名、山の上のトーチカで、常にトーチカをグルグル回ったの動哨警備である。私の勤務中は幸いに警襲はなかったが、行く前には一度あったと聞いている。

この付近は比較的治安は維持されているというが、占領地は点であって面ではない。とくに中隊警備隊は連隊本部から距離が遠く、分屯隊はさらに離れて点在

しているから、敵状監視や情報収集は大切な任務であり、万一襲撃されれば敵中に孤立して戦わねばならぬ。

分屯隊の食糧は一日置きに大隊本部へ受領に行く。

古参兵とわれわれ初年兵で、現地人の手伝い(苦力)に天秤棒を担がせて行くのである。途中の治安はよく襲撃されたことはない。トーチカでは、時折、村長や部落の有力者が卵などを持ってくる。そのときは、たいがい薬が欲しい時である。ほとんど薬を飲んだことのない住民が多いから、仁丹でも、クレオソートでも、飲めば翌日治り、そのお札にもくるのである。住民は、長い間、日本軍により治安が維持されていることを知っていて、日本軍に対しては感謝しつつ共存していたのである。

トーチカは二階建てで、勤務(動哨)は二時間交代である。トーチカの外には炊事場があるだけで、苦力一人を炊事場で使っていたが、苦力はトーチカ内に入れない。敵地に巡察に行き鶏卵などをもちょうこともあるが、トーチカは水路近くにあり、上下する船の荷物を

の検査もする。武器、弾薬やTNT爆薬などを検査・押収するのである。検問のとき、「魚心・水心」で若干の砂糖漬け乾燥棗(なつめ)などを置いてゆく者もあった。上海行きの船は五、六メートルの小船もあり、黄色い厚紙など一束二〇キロぐらいのものを積んだのが多く、一人で船を操作している。われわれは銃に弾込めして警戒しつつ検査するのである。トーチカからは、その検問状況を監視している。いつ、どこから敵がくるか分からないので緊張の連続である。便衣の者は民間人か敵か外見分からぬから、外から触ってみる(拳銃など持っているか否か)。しかし、私の勤務中、怪しい者は見つからなかった。

分哨勤務交代は三カ月くらいだったと思うが、中隊にいるより分哨にいる方が、気分的にも楽だった。分哨内では私的制裁もなかったし、班長が予備役の下士官の人で、良い人だったので、班内は和氣藹々だ。共同生活で一つの目的をもって勤めるには、人によって良い環境も悪い環境にもなる。軍隊のように自己の損得だけではなく、最後は生命共同体であるから、特に

感じている。

分屯隊に対する空襲はなかったが、蕪湖の本隊ではあった。われわれの中隊からは分屯隊が二カ所と、中隊の上にトーチカがあつて警備を主としていた。

私が討伐に出たのは夜間で、小隊長以下三〇人での出動だった。夜間行動すると部落で犬が吠え、われわれの隠密の行動が事前に分かつてしまうことが多い。そのため敵に察知されてしまうらしい。昭和二十年ころになると、米軍が支那大陸に逆上陸するらしいとか、内地への進攻があるなどで、支那派遣軍の占領地区も逐次縮少し、南京、上海方面に終結するため移動が始まっていた。しかし、われわれ下部のものには二十年八月まで、具体的な戦況などの情報はあまり知らされていなかった。

八月十五日、わが中隊は鶏頭嶺で警備していたが、重大放送があるというので、「大隊本部集合」の命令があった。前にも述べたように、十五日以前には何の報道もなかった。

大隊本部へは、分哨や各中隊は撤退せず、守備兵を

残して集合した。私は、本部へ行ったが、放送は雑音が入りよく聞こえず、また、陛下の声も小さかった。とくに、私は後の方だったので放送の内容が分からなかった。放送が終わったのちに、前の方の人々が「戦争に負けた」と言ったので初めて敗戦を知った。

私は、この戦いが負けるとは全然思っていなかった。私の家は八人兄弟で、そのうち七人が出征した。父は毎月一日と十五日には、雨が降っても風が吹いても、鎮守様にお詣りに行っていた。部落の他の人はこなくとも、一人でお詣りしていたという。そのお陰か、三番目の兄が負傷しただけで、兄弟全員が生還することができた。私のような尻の方（六男）は戦死した方が良かった。「親は飴玉もなめられぬ」と思ったり、近所で一人息子が戦死した家もあったので、気の毒だと思っていた。しかし、親にとつては、一人でも八人でも皆大事な子どもだ。

わが家で、長男も次男も千葉佐倉連隊に入った。私の下が海軍へ志願し内地だったが、他の六人は全部戦地（南方に二人）に行き、我が家は「軍国一家」だっ

た。父が一日も欠かさずお宮詣りをしてくれたお陰だ  
と思う。われわれ兄弟の留守中、父母で農業（稲作が  
主力）に従事し、内地の国民とし、留守家族として立  
派に任務を果たしてくれた。戦地からできるだけ文通  
はしていたので、われわれ息子たちの消息はある程度  
分かっていったようだった。

終戦後、分屯隊はトーチカを撤収し、連隊は蕪湖に  
集結した。中国軍による武装解除は九月上旬だったよ  
うに記憶する。宿泊は部隊本部に入られず、他に仮兵  
舎を作って生活をはじめた。被服はそのままだが、洗  
濯物を干しても番をしていないと中国人に持ってい  
かされる。四囲は有刺鉄線で囲っているが、竹竿で洗濯物  
を取られてしまう。中国人は戦勝国だということで、子  
どもが石や棒を投げつけることもある。しかし、食糧  
は自分の部隊の糧秣を使って炊事場で作った。

二十一年四月、部隊主力は上海へ船で行き、復員し  
ていった。

私は残留せよと命ぜられた。一個中隊二〇人くらい  
と少尉の将校一人が残った。残留者はわれわれのよう

に若い者ばかりで同年兵が多かった。私の下には現地  
召集兵と現役初年兵（昭和十九年兵）がいた。その中  
に元大蔵大臣の村山達雄代議士がおられた。九〇キロ  
もある体で、動作も鈍いので、古参兵から何かと言わ  
れ、教育のためビンタを食わされたこともあった。そ  
れは、古参兵に初年兵のことで文句を言う、お前の教  
育が悪いからだ、われわれは上と下との板挟みとな  
る。しかし、初年兵を庇わなければならない。三年兵  
はよいが、私ら二年兵はつらい。

残置隊となると、仕事はなく、食糧の調達之苦労も  
なくなり、私物と交換しなくてもよくはなった。内地  
には木綿糸がないと聞いたので、靴下を解いて、チョッ  
キに編んで着た。カーキ色や白を作って編んで着た。  
このチョッキは帰国後、母に話したら、内地には糸が  
ないので母は喜んでいた。

昭和二十一年七月に、残留者全部集合し上海に行き、  
最後の復員船に乗り帰国した。家には、内地勤務だっ  
た海軍の弟は早く帰ったが、南方へ行った二人と、シ  
ベリア抑留中のすぐ上の兄はまだ帰っていないかった。

父母は喜んでいた。「神に祈っていただけのことがあった」と思っていたのだと思う。

現在、一番上の姉は八十七歳で元気でいる。皆と交わらなければボケるといって、一日置きに踊りに行っている。長兄は大正元年生まれ、健在。兄弟のうち五人は健在である。戦争犠牲者の多い中、父母の祈りのお陰か、全員無事生還でき、現在までの幸せを感謝している日々である。

## 歩兵第百二十連隊

### 中支作戦に生還して

福井県 柏谷 富二雄

私は大正八年二月一日生まれ。昭和十六年十二月八日、対米への宣戦布告により太平洋戦争（大東亜戦争）に突入したため、学徒動員第一回のいわゆる「繰り上げ卒業」により、昭和十六年十二月、明治大学商学部を卒業した。本来なら、十七年三月卒業であったが、

卒業と同時に私は南満州鉄道（満鉄）の傍系会社S社に入社、一カ月間東京支社に勤務し、社員として在籍のまま二月一日、福井県鯖江の歩兵第三十六連隊に入営した。しかし、このS社は日本の敗戦により日本政府指定閉鎖機関となり、終戦後間もなく自然消滅し、現存していない。

入隊の経緯と、初年兵当時の軍隊生活及び

外地転属後の状況

第一乙種合格、幹部候補生要員として鯖江第三十六連隊歩兵砲中隊（藤岡隊）に入隊し、同期新入隊員は五〇名くらいだった。三カ月の短期教育期間も終わり、各々幹部要員甲、乙種に分かれ、三人ばかり兵として残留したが、そのうちの一人として、動作が目立つた。換言すれば原隊内も日本軍隊の末期的現象を露呈していた。内心早く原隊から脱出できないかと考えていたが、四月になって新入隊員が入隊し、六月になって中支に出征するというところで、私も首尾よくこれに編入され、便乗して野戦に赴くことになった。